

沈黙という加担

北海道 旭川市立東光中学校 1年
小川 梨彩 (おがわ りさ)

もし、目の前で誰かが傷つけられていたらあなたは声を上げれるだろうか。
あの日、私はそれができなかった。

小学四年生の秋、休み時間の廊下に女子五人の輪があった。その輪の中には、私の友達もいた。彼女たちは何かをひそひそ話し、時折顔を見合わせて笑っていた。楽しそうな笑い声が廊下に響く。でも、輪の中の友達の表情は固く、ずっと俯いたままだった。

私は足を止めて様子を見ていた。再び響く笑い声。友達に目を向けた時、一筋の涙が頬を伝って床に溢れる。その瞬間、はっとした。「助けなきゃ」その気持ちでいっぱいだった。それなのに、何もできなかった。声を上げたら、自分が悪者扱いされたり変に思われるかもしれない。そんな恐怖で足が地面に縫い付けられたように動かない。心は必死に叫んでいるのに、声は出なかった。恐怖に負けた私は、そのまま通りすぎるだけだった。振り返る勇気すらもない自分に腹が立った。

次の日から、友達はいじめの標的で陰口や無視、仲間外れなど、陰湿な行為をくり返された。しかし、いじめはエスカレートしていくばかり。わざと聞こえるように飛び交う心無い言葉が友達を苦しめた。それでも私は何もできなかった。ただ、見ているだけの自分が情けなくてたまらない。日に日に友達のお日様のような明るい笑顔も消えていく。次第に、友達は学校に来なくなってしまった。

教室には空いた席がポツンとあった。机の中に溜まっていくプリントを見る度に胸が痛む。「あの時、一言でも声をかけられれば」そんな後悔が心から消えない。

ある日、学校で人権教室があった。そこではじめて、私は「傍観者」の存在を知った。

その日からずっと考えた。あの日の私はどんな存在だったのか。自分でも気づきたくなかった。だけど気づいた。見て見ぬふりをした私は、沈黙という形でいじめに加担していたことに。私は「傍観者」として友達を傷つけた。

年月が経っても、あの日の記憶は決して消えなかった。むしろ、時を重ねるご

とに心の奥深くに刻まれる。廊下に響いた笑い声、友達の頬から溢れた涙、忘れてはいけない記憶が度々よみがえる。後悔の波は、時と共に形を変えて何度も押し寄せた。

中学生になった今、私は、あの日の自分を二度と繰り返さないと心に決めた。もし、また目の前で誰かが傷つけられていたら、後のことを恐れる自分ではなく、勇気を出して誰かを守れる自分になる。「やめなよ」と直接言えなくても、「大丈夫？」と寄り添うことはできる。小さな勇気かもしれないけれど、沈黙して加担する自分よりもずっといい。

人は誰でも、いじめの「傍観者」になる可能性がある。傍観者はただその場にいただけの人ではない。表面上は何もしていないように見えても、その沈黙や無反応は、被害者に「味方はいない」という絶望を与え、加害者には「してもいい」という許しを与えてしまう存在だ。つまり、傍観者は、見て見ぬふりという形でいじめに加担してしまう。

誰かを守るためには声を上げなければいけない。声を上げることは勇気がいる。次は自分が狙われるかもしれない、仲間外れにされたり無視されたりするかもしれない。その恐怖はとても大きい。しかし、声を上げないことにも責任がある。沈黙は、そこに居る誰かが傷つくことを許してしまう行為だから。あの日の私がそうだったように。

いじめを完全になくすことは簡単ではない。でも、見ている人が「それ、やめようよ」と勇気を出せば空気は変わる。その場で勇気が出せなくても、先生や頼れる大人に伝えるだけでもいい。声を張り上げることだけが、誰かの味方になることじゃないからだ。

私にできることは多くないかもしれない。でも、あの日の後悔があるからこそ、私は動ける。もう二度と、誰かを孤立させる側にはならない。誰かが助けてくれるのを待つ人ではなく、自分が助ける人になる。私はこれから、沈黙ではなく、行動で人を守る人間でありたい。この覚悟が、誰かの人生を守る力になると信じている。